台大日本語文研究第 34 期
2017 年 12 月，頁 1-24
2017-09-12 收稿，2017-11-06 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP.2017.34.1

日本平安朝物語文學中服裝的作用
—關於其視、聽、嗅覺性的審美觀—

賴振南*

摘要

日本平安朝貴族社會的現實生活中，男女交際被重重的簾幕、屏風、隔屏衣架等等家具遮掩、阻斷了視線，在此狀態下，除了女性的襲衣(襲，kasane)服飾袖口外，男性為了認識女性只能啟動視覺以外的感官。為此，才會出現有如《宇津保物語》中的音樂，成為審美感的重要媒介。更甚者，若利用嗅覺性化妝用品的香料或香木，會比起視覺性的化妝和音樂音效，更無形無音，不僅可穿透遮蔽物和空間，甚至連時間都可以超越。

平安朝貴族社會中，服裝除了有顏色和模樣的視覺性印象外，可以藉由「衣服動靜間」產生的衣服摩擦音的聽覺性效果，以及「體香(人香 hitoriga)」、「移染香韻(移り香 utsuriga)」的嗅覺性意義也是重要要素。平安時代代表性文化的裳唐衣姿（mokaraginusugata，日本和服），比起女性特徵的亮麗芳香、髮長及地的黑髮，寧可說才是男女雙方足以展現自我的身體和靈魂的容器。本拙論的考察目的在於，出現在日本平安朝物語文學中的書中人物，透過視覺、聽覺、嗅覺性的審美觀，如何展演出服裝顏色、與自然共鳴的服裝模樣、薰染進衣服的香味以及能感知對象動靜的「衣服摩擦音」?並如何透過服裝，創造出其中的共鳴作用來?

日本平安朝貴族們的感官特性，雖然是從視覺性審美觀發達至聽覺性、嗅覺性審美觀，但是比起女性的黑髮來，足以展現男女彼此之間全身的身體和靈魂容器的和服，可以透過色澤、與自然共鳴的模樣、

* 天主教輔仁大學外語學院院長/日本語文學系教授

臺灣大學學術期刊資料庫

薫染進衣服的「體香」、「移染香韻」等功能，除了能表現出視覺、聽覺、嗅覺的美感之外，服裝更可以將視覺、聽覺、嗅覺性審美觀一體化並展現其功效。

關鍵詞：服裝顏色、服裝模様、衣服摩擦音、體香、香韻移染

臺灣大學學術期刊資料庫

The Role of Clothing In the Monogatori of Early and Middle Heian Period: Visual, Audial and Olfactory Aesthetics

Chen-nan Lai *

Abstract

In the aristocratic society of Ancient Japan, men and women were blocked by heavy curtains, screens and other furniture and only the cuff of women's kasane which protrudes beyond the folding screen could be seen. In order to get to know the woman, men could only use other senses. To this end, music becomes an important medium of aesthetic sense in *Utsubo Monogatari*. Furthermore, the use of olfactory cosmetic such as perfume or incense is more effective than visual make-up and music. Not only can they breach the hindrances of folding screens and space, they can even go beyond time.

In the aristocratic society, in addition to the visual impression of color and appearance of the clothing, the auditory effect of the frictional sound of the clothes and the "body odor" (*hitoriga*), lingering fragrance (*utsuriga*) is also important. Compared to the feminine fragrance, floor length hair, the *Mokaraginusugata*, Japanese kimono, is the piece of clothing that enables both men and women to display their body and soul. The purpose of this study is to understand the how the senses (Visual, Audial and Olfactory) influenced the development of the color of clothing, the appearance of natural garments, the aroma of the clothes, the smell of the clothes, and frictional sound of the clothes.

The sensory characteristics of the noble class of Japan are developed from visual senses to auditory and olfactory senses. In comparison with the

* Dean,College of Foreigne Languages/Professor,Department of Japanese at Fu Jen Catholic University

臺灣大學學術期刊資料庫

female black hair, the kimono is a container displaying the body and soul between men and women. The kimono is able to do so through color, natural resonance of the appearance, "body incense" smoked into the clothes, "lingering fragrance" and other methods. Therefore, the kimono can display visual, auditory, olfactory aesthetics, and it can be said that it also combines visual, auditory, olfactory aesthetics in one piece of clothing.

Keywords: Color of clothes, Style and appearance of clothes, Rustle of one's dress, Human body Scent /Odor, Lingering fragrance/scent

臺灣大學學術期刊資料庫

日本平安朝物語文学における衣装の役割
——その視・聴・嗅覚的審美観について——

頼振南*

要旨

日本平安朝の貴族社会の男女交際が幾重もの簾、屏風、几帳などに遮られている状態において、女性の装束の襲の袖口などを除き、男性が女性を認識するには視覚以外の感性を働かせるほかない。したがって『うつほ物語』のように音楽が審美感の重要な媒介となった。加えて嗅覚的な化粧品の香を利用すれば、視覚的な化粧や音楽の音より無形無音であり、それは遮蔽物、空間を通り抜けるだけでなく、過ぎゆく時にも耐え得るのである。

平安朝の貴族社会における装束は色と模様の視覚的印象があるほか、「御衣のけはひ」という衣擦れの音の聴覚的効果と「人香(ひとが)」、「移り香(うつり)」の嗅覚的意味も重要であろう。平安時代の代表的文化である裳唐衣姿等の装束は男女（特に女性）が自己を表現する、言わば身体と魂の容器なのである。日本平安朝物語文学に登場した人物は、視・聴・嗅覚的審美観を通して、衣装の色や自然と共鳴しあう文様、衣服に染み込んだ香と人の気配を相手に感知させる衣擦れの音とをいかに美的に演出するか、その共鳴作用をいかに創りあげていくかという点を考察するのが本論の目的である。

日本平安朝の貴族たちの感性は視覚的審美観から聴覚的、嗅覚的審美観へと発達してきた。男女がお互いに全身で表現できる衣装は、色彩、季節の移ろいと共鳴しあう襲や文様、衣装に染み込んだ「人香」、「移り香」などを通して各々の視覚、聴覚、嗅覚の美を表現するにとどまらず、視・聴・嗅覚的審美観を一体化し効果を上げることを可能としたのである。

* 輔仁大学外国語学部部長・日本語文学科教授

臺灣大學學術期刊資料庫

キーワード：衣装の色彩、衣装の文様、衣擦れの音、人香、移り香

臺灣大學學術期刊資料庫

日本平安朝物語文学における衣装の役割
――その視・聴・嗅覚的審美観について――

賴振南

一、はじめに

まず、安原盛彦氏が『源氏物語』における寝殿造の空間性について以下述べた言葉を借りて、物語空間のあり方を見ておきたい。

> 貴族の女性は日常、家の外へは、たやすく出られません。寝殿造という、大きな庭をもつ建て方でつくられた屋敷（住宅）の、寝殿あるいは、その少し離れた横の対（對）という建物の中、深く閉じこもっていました。男と女が直接出会うのは、ほとんどがこの寝殿造の家の中、特に建物の中で、そこは女の空間でした。（中略）寝殿造という空間の光と闇が、二人の関係に大きな影響を及ぼします。空間を感じとるのは五感です。光と闇の空間の中に、男君と女君は何を感じ取っていたのでしょうか。（中略）『源氏物語』を読むと、読者がまるで男君と女君がいる現場に、立ち会っているかのような表現を、あちこちに見ることができます。五感を駆使してそれらを読み解いてゆくとき、そこに臨場感あふれる場所、空間が現れます。物語性が空間性に支えられているのです。[1]

「空間を感じ取る」五感を駆使して文字で表現された物語の臨場感を読み解いてゆくことは物語の物語性に対する理解を高めることにつながる。無論、貴族社会においては寝殿造が貴族たちの生活に大きな役割を果たしているが、その空間で貴族たちは、その五感の感性をより研ぎ澄ますことになる。物語の中では、見る、聞く、嗅ぐに長けた貴族たちにとって、前にある障害物を越えて見よう、聞こう、嗅ごうとする意識、意欲こそが人、もの、事、匂い、空間、

[1] 安原盛彦(2013)『源氏物語　男君と女君の接近―寝殿造の光と闇―』河北新報 p.13－14

臺灣大學學術期刊資料庫

気配等の視覚化・聴覚化・嗅覚化のための欠くべからざる契機となり得る。例えば視覚が塞がれても、その他の感覚を働かせて、その場の状況と情報を把握しようとするのであり、謂わば身体全体、五感の全てを駆使するわけで、使える感覚を悉く対象に集中させ、目で見えなければ耳を用い、耳で聞こえなければ、鼻によって特定の匂いや香りを認識するといった具合である。

人間の五感が感覚器官の目、耳、舌、鼻と手足等を通してそれぞれ独立した役割を果たしながら、一方で連合作用も起こすという視点から日本平安時代の男女交際の場面を分析し、どのような媒介によっていかに特徴的な審美観を引き出しているかをここでは探ってみたい。

五感の中でも、視覚による美醜判断が最も直接的であるのは言うまでもない。たとえば『竹取物語』における多くの求婚者たちが「なよ竹のかぐや姫」に求婚する場面は以下の通りである。

> 世界の男、貴なるも賤しきも、このかぐや姫を、得てしがな、見てしがなと、音に聞きめでて惑ふ。そのあたりの垣にも、家の門にも、をる人だにたはやすく見るまじきものを、夜は安く寝も寝ず、闇の夜に出でても穴をくじり、垣間見、惑ひあへり。[2]

と、求婚者たちはかぐや姫を見たがって、穴が開くほど覗こうとしても、結局、見ることもできないどころか、かぐや姫の家の人たちにさえ相手にしてもらえない。

要するに、日本平安朝の貴族社会の男女交際が幾重もの簾、屏風、几帳などに遮断され、女性の顔面や姿は親兄弟、侍女や受け入れる夫となる男性や家族など、いわゆる内輪の人々にしか見せられないわけで、三色（赤、白、黒）[3]に基づく白粉、お歯黒、頬紅、髪、眉

---

[2] 野口元大校注(1979) 新潮日本古典集成『竹取物語』新潮社　p.11

[3] 高橋雅夫(1997)『化粧ものがたり―赤・白・黒の世界』雄山閣　p.i
「はじめに」：「赤・白・黒」という配色は、日本人には格別な色彩感情をもって親しまれてきたようです。この配色を構成する赤と白と黒という単色の色彩イメージを、古代日本人が最初にいだいたのは、おそらく自然界からでしょう。（ただし、平安時代では緑も重要な色である。）

臺灣大學學術期刊資料庫

墨などの化粧は家庭内の生活必需品であり、恋の場での媒介としては視覚の役割は少なかったようである。ただし、たとえば『伊勢物語』23 段筒井筒の章段に

（略）この女、いとよう化粧じて、うちながめて、
風吹けば沖つしら浪たつた山夜半にや君がひとりこゆらむ
とよみけるを聞きて、かぎりなくかなしと思ひて、河内へもいかずなりにけり。[4]

とあるように、男が心の離れた妻の殊勝な姿をかいま見て再び妻に心を寄せる例もある。

顔を見せない女性の容姿に美醜を求める王朝男性は御簾や几帳、屏風のかなたの女性の香しい装束や髪の香りから美人か否かを鋭敏に判断する。目に見えない香りは聴覚的な音楽より無形無音であり、遮断された空間を乗り越え人の記憶に刻まれる。

『源氏物語』「賢木」巻で、光源氏は出家した藤壺の御前に参上し、女房を通して次のように語る場面がある。

風はげしう吹きふぶきて、御簾の内の匂ひ、いともの深き黒方にしみて、名香の煙もほのかなり。大将の御匂ひさへ薫りあひ、めでたく、極楽思ひやらるる夜のさまなり。[5]（『源氏物語』（2）「賢木」巻、p.132）

同じ室内に黒方（冬季の香）と名香の煙（仏に供する香）とが入り混じり、さらに光源氏の衣服も「匂ひさへ薫りあひ」と加えられ、その芳ばしさは「極楽」のようであったという。平安時代の貴族たちの嗅覚の鋭さ、異なった幾種類もの香の匂いを嗅ぎ分けられる鋭敏さが窺われる場面であろう。

---

[4] 片桐洋一　福井貞助　高橋正治　清水好子　校注／訳（1994）『竹取物語　伊勢物語　大和物語　平中物語』新編日本古典文学全集　小学館　p.137。本論文の用例検索は（知識探索サイト　ジャパンナレッジ　プラス　JapanKnowledge+、「新編 日本古典文学全集」）http://www.jkn21.com/koten/displaymain に拠る。

[5] 阿部秋生　秋山 虔　今井源衛　鈴木日出男　校注／訳（1994～1998）『源氏物語（1）～（6）』新編日本古典文学全集　小学館。本論文の用例検索は（知識探索サイト　ジャパンナレッジ　プラス　JapanKnowledge+、「新編 日本古典文学全集」）http://www.jkn21.com/koten/displaymain に拠る。

臺灣大學學術期刊論文授權

繰り返しになるが、日本平安朝の貴族社会の男女交際が幾重もの簾、屏風、几帳などに遮られている状態において、女性の装束の襲の袖口などを除き、男性が女性を認識するには視覚以外の感性を働かせるほかない。したがって『うつほ物語』のように、音楽が審美感の重要な媒介ともなった。さらに嗅覚的な化粧用品の香を利用すれば、視覚的な化粧や音楽の音より無形無音であり、それは遮蔽物、空間を通り抜けるだけでなく、時間さえも超越し得るのである。このように、日本平安朝の貴族たちの感性は外光のもとから室内的なあり方の重視へ、視覚的審美観から聴覚的、嗅覚的審美観へと変容していったようである。[6]

上記の『源氏物語』「賢木」巻の用例に明らかなように、直接触れ合う触覚と飲食の味覚を除けば、平安朝の貴族社会における装束は色と模様の視覚的印象があるほか、「御衣のけはひ」(『源氏物語』空蟬巻）という衣擦れの音の聴覚的効果と「人香（ひとが）」(『源氏物語』空蟬巻）の嗅覚的意味も重要であろう。平安時代の代表的文化である裳唐衣姿は、女性の特徴である光沢を湛えた香り高い黒髪とともに、「魂の容器」としての衣服、つまり身体性に関わる媒体なのである。日本平安朝物語文学に登場した人物が、視・聴・嗅覚的審美観を通して、衣装の色や季節の移ろいと共鳴しあう襲、文様と、衣服に染み込んだ香りと人の気配を相手に感知させる衣擦れの音とをいかに美的に演出するかという点を考察するのが本論にとって主眼となる。

二、衣装の色と模様の視覚的印象

前述の衣服が「魂の容器」であるという点について、三田村雅子氏が「身体感覚で捉える『源氏物語』」の中で、民俗学的観点からであろうか、次のように述べている。

> 昔はお正月になると着物を新調していましたね。奉公人たちみんなにも仕立て下ろしの着物をあげるということが、その家の

[6] 拙論（2016)「視覚的審美観から聴覚的、嗅覚的審美観への発達―平安朝初・中期の作り物語を中心に―」『台大日本語文研究』32 期 p.56－57

臺灣大學學術期刊資料庫

人であることのしるしだった。あれは、着物に魂をこめてあげる慣習です。お年玉の「玉」も「魂」だと言われますが、新年のお仕着せも魂を分与する手段です。あげる人の魂を分与する、魂をあげるんですね。着物は魂の容器なんです。[7]

この指摘は古代の例ではないのでにわかには「魂の容器」説の根拠とはなし得ないが、『源氏物語』の次のような例がこうした考えの根底にはあるのかもしれない。「葵」巻で葵上に憑いた六条御息所の生霊と思われる物の怪の和歌

なげきわび空に乱るるわが魂を結びとどめよしたがひのつま

（源氏物語（2）「葵」巻、p.40）

には衣服（「つま」）が「魂」をつなぎとめる重要なはたらきをすることが述べられている。また、続く物の怪調伏との関わりで六条御息所は衣服を何度着替えても身体の内側から物の怪調伏の「芥子の香」を髪と衣服に感じたという。これは魂の移動（「あくがるる」）の如何に関わらず「芥子の香」が魂そのものに染みついたとも理解され、その香が衣服に染みている、すなわち「芥子の香」と一体の「魂」も衣服に籠っているということであろうか。以上のような考えの延長に、魂は衣服という贈与・交換されうる形を媒介として人に分与できるとする考えが生まれてくるのかもしれない。

『源氏物語』「玉鬘」巻に出てくる六条院の衣配りの場面は三田村氏の指摘した意義の他に、衣装の色と文様の視覚的効果が非常に印象的である。太政大臣の位に上った光源氏は 35 歳の秋に、壮麗な六条院を完成させ、妻たちを連れ、これまで住んでいた二条院から移住してきた。その年の暮れに、光源氏は源氏邸の衣装を管理している正妻格の紫上と、妻たちにお正月に装う晴れ着を贈ることを相談し合って、方々の身分、人柄と器量に合わせて次の通りに衣装を選んでいく。

---

[7] 三田村雅子(2008)「着物は魂の容器」（藤原克己、三田村雅子、日向一雅　著『源氏物語―におう、よそおう、いのる』「第２章　『源氏物語』の〈衣〉――染める、縫う、贈る」ウェッジ p.116

臺灣大學學術期刊資料庫

○紫の上に「紅梅のいと紋浮きたる葡萄染の御小袿、今様色のいとすぐれたる」(紅梅の模様がとてもよく浮いている葡萄染の御小袿と今様色のじつにみごとなの)

○明石の姫君に「桜の細長に、艶やかなる掻練とり添へて」(桜の細長に色つややかな掻練を取りそろえたの)

○花散里に「浅縹の海賦の織物、織りざまなまめきたれどにほひやかならぬに、いと濃き掻練具して」(浅縹色の海賦の織物の、織りざまは優美だが色のさほど目立たない表着に、ごく濃い紅の掻練の下襲をそろえて)

○玉鬘に「曇りなく赤きに、山吹の花の細長」(曇りなく真っ赤な表着に山吹の花模様のある細長)

○末摘花に「柳の織物の、よしある唐草を乱れ織れるも、いとなまめきたれば」(柳の織物の由緒ありげな唐草の乱れ模様の織り出してあるのも、ほんとに優艶な感じなので)

○明石の上に「梅の折枝、蝶、鳥飛びちがひ、唐めいたる白き小袿に濃きが艶やかなる重ねて」(梅の折り枝に、蝶や鳥が飛びちがっている模様の舶来風の白い小袿に、濃紫の艶のあるのを重ねて)

○空蟬に 「青鈍の織物、いと心ばせあるを見つけたまひて、御料にある梔子の御衣、聴色なる添へたまひて」(青鈍色の織物のまことに趣味のいいのをお見つけになって、ご自分のお召料の中の梔子色の御衣の聴色のを加えになって)[8]

物語というのは、文字による描写内容から読者の想像力を刺激し、挿絵等がなくても、「こんな色が似合う女性はいったいどんな人か」という視覚的なイメージを浮かび上がらせる。例えば高貴な紫色、天皇からの許しを貰った人でないと着ることのできない聴色(薄紅色)など、様々な色を組み合わせて、その人に相応しい衣装の色を定めてゆく。その過程において視覚的な美意識が具体化され、前述の六条院の衣配りの場面を、読者はまさに現代のファッションショ

[8] 『源氏物語』(3)「玉鬘」巻 p.135～136

臺灣大學學術期刊資料庫

一のように愉しむことができるのである。

衣装の色彩と文様の一番刺激な視覚的印象は「かいま見る」[9]ことである。『源氏物語』の中でもっとも劇的なそれは、「若菜上」巻における、六条院の蹴鞠の遊びで柏木が偶然にも御簾越しの女三宮の姿をかいま見る場面であろう。

> 几帳の際すこし入りたるほどに、袿姿にて立ちたまへる人あり。階より西の二の間の東のそばなれば、紛れどころもなくあらはに見入れらる。紅梅にやあらむ、濃き薄きすぎすぎにあまた重なりたるけぢめはなやかに、草子のつまのやうに見えて、桜の織物の細長なるべし。御髪の裾までけざやかに見ゆるは、糸をよりかけたるやうになびきて、裾のふさやかにそがれたる、いとうつくしげにて、七八寸ばかりぞあまりたまへる。(源氏物語(4)「若菜　上」巻、p.141)

柏木の目が捉えた女三宮は、「袿姿」の色と模様である。男性は、容姿を見ることのなかった女性を、瞬間的に間近に目にすることで胸をときめかせ、「欲望と禁忌」の心理を助長させる。その心理の揺らぎの中に、恋を中心として展開される王朝貴族物語に新たな物語の要素が加わるわけである。物語作家はこうした恋の行動様式を、虚構の契機として物語に導入し、物語を立体化してゆくのである。つまり、作者はかいま見る者の心理的葛藤とかいま見られる者の神秘的容姿との間に醸成される緊張感、隠されているがゆえに募る欲望を、二つの物語空間として、読者の視覚に訴えかける。

三、衣擦れの音の聴覚的効果

前述のように恋しい対象に五感を集中させ、まず目で見たいが、見えなければ耳を澄まして相手が出す音あるいは声を聞こうとする。特に家族関係ではない男女が直接対面して会話することはほぼ不可

---

[9] 今井源衛(1948)「古代小説創作上の一手法―垣間見について―」『国語と国文学』第 25 巻 3 号
今井源衛(1970)「物語構成上の一手法――かいま見について――」(『王朝文学の研究』角川書店

臺灣大學學術期刊資料庫

能なので、ほのかに聞こえてくる楽器の音色、人の気配や衣擦れの音などを介して感情が高揚していく。そうした意義を担うからこそ『うつほ物語』に描かれた秘琴一族の音楽の音色は審美感の重要な媒介ともなっているのである。しかし、楽器弾奏の音色が終日聞こえることはないのに対し、衣擦れの音、衣擦れの音による人の気配ならば人物に纏わり付き、身体が動けば音が響く。衣装の着こなしによって擦れる音にわずかに違いが生じ、その音や気配によって、鋭敏な聴覚を持っている平安貴族たちは部屋の奥にいる人物の位置、時には身分や人柄などまで推測できるのである。

雨夜の品定めの翌日、光源氏は紀伊守邸へ方違えに赴き、空蟬と契るが、物語の展開において、次の一節の衣擦れの音と人の気配が大きな役割を果たしている。

> 思ひあがれる気色に聞きおきたまへるむすめなれば、ゆかしくて、耳とどめたまへるに、この西面にぞ人のけはひする。衣の音なひはらはらとして、若き声ども憎からず。さすがに忍びて笑ひなどするけはひことさらびたり。(源氏物語(1)帚木　P.94)

空蟬は、思いがけず光源氏と契りを結んだが、自分の境遇のわびしさを痛感し、それ以降、光源氏の愛情を拒む。光源氏が空蟬の寝所に再び忍び入り、思いがけず軒端荻と契るまでの一連の場面描写は衣擦れの音の聴覚的印象によって効果的に描かれている。

> 碁打ちはてつるにやあらむ、うちそよめく心地して人々あかるるけはひなどすなり。(略)いかにぞ、をこがましきこともこそと思すに、いとつつましけれど、導くままに母屋の几帳の帷子ひき上げて、いとやをら入りたまふとすれど、みなしづまれる夜の御衣のけはひ、やはらかなるしもいとしるかりけり。(源氏物語(1)「空蟬」巻、p.122～124)

耳で「うちそよめく(衣擦れの音)」を判断し、空蟬が軒端萩と打っていた碁が終わって、皆が寝静まった好機に、光源氏は秘かに空蟬の寝所に忍び込むのだが、今度は逆に空蟬が闖入した光源氏の「御衣のけはひ(衣擦れの音)」に気がつく。次の視、聴、嗅覚の重なる

臺灣大學學術期刊資料庫

場面を見てみよう。

若き人は何心なくいとようまどろみたるべし。かかるけはひのいとかうばしくうち匂ふに、顔をもたげたるに、ひとへうちかけたる几帳の隙間に、暗けれど、うちみじろき寄るけはひいとしるし。あさましくおぼえて、ともかくも思ひ分かれず、やをら起き出でて、生絹なる単衣をひとつ着てすべり出でにけり。（源氏物語（1）「空蟬」巻、p.124）

空蟬は光源氏の衣擦れの気配、着物から漂ってくる香ばしい匂いやにじりよってくる人の気配に気づき、そっと寝床を抜け出す。「帚木」巻から「夕顔」巻まで続く空蟬物語を読むと、読者はしばらく聴覚と気配への神経が過敏になったような気になるが、几帳などの障害物の向こうにいる女性の衣擦れの音や人の気配などの聴覚的な刺激も薫物の効果と相俟って、平安朝貴族生活の豪奢な様を実にリアルに描写している。

『源氏物語』における衣擦れの音の聴覚的効果の描写は初期物語の『竹取物語』『うつほ物語』『落窪物語』等のいずれよりも多く、次のような「そよそよ」[10]、「うちそよめく」[11]、「衣の音（なひ）」[12]などの例が各巻に散見する。

『源氏物語』「若紫」巻の「源氏、尼君に意中を訴え、拒まれる」段に、

内にも人の寝ぬけはひしるくて、いと忍びたれど、数珠の脇息にひき鳴らさるる音ほの聞こえ、なつかしううちそよめく音なひあてはかなりと聞きたまひて、ほどもなく近けれど、外に立てわたしたる屏風の中をすこしひき開けて、扇を鳴らしたまへば、おぼえなき心地すべかめれど、聞き知らぬやうにやとてゐざり出づる人あなり。（源氏物語（1）「若紫」巻、p.215）

[10] 『竹取物語』（0例）『うつほ物語』（0例）『落窪物語』（2例）『源氏物語』（2例）

[11] 『竹取物語』（0例）『うつほ物語』（0例）『落窪物語』（0例）『源氏物語』（3例）

[12] 『竹取物語』（0例）『うつほ物語』（0例）『落窪物語』（0例）『源氏物語』（9例）

臺灣大學學術期刊資料庫

「賢木」巻の「源氏、出家した藤壺の御前に参上する」段に、

御簾の内のけはひ、そこら集ひさぶらふ人の衣の音なひ、しめやかにふるまひなして、うち身じろきつつ、悲しげさの慰めがたげに洩り聞こゆる気色、ことわりにいみじと聞きたまふ。(源氏物語（2)「賢木」巻、p.132)

「若菜　上」巻の「猫、御簾を引き開け、柏木、女三の宮を見る」段に、

唐猫のいと小さくをかしげなるを、すこし大きなる猫追ひつづきて、にはかに御簾のつまより走り出づるに、人々おびえ騒ぎてそよそよと身じろきさまよふけはひども、衣の音なひ、耳かしがましき心地す。(源氏物語（4)「若菜　上」巻、p.140)

「夕霧」巻の「夕霧、落葉の宮と贈答、胸中を訴える」段に、

宮は、奥の方にいと忍びておはしませど、ことごとしからぬ旅の御しつらひ、浅きやうなる御座のほどにて、人の御けはひおのづからしるし。いとやはらかにうち身じろきなどしたまふ御衣のおとなひ、さばかりななりと聞きゐたまへり。(源氏物語(4)「夕霧」巻、p.399～400)

「浮舟」巻の「匂宮、大内記の案内により宇治に赴く」段に、

我も、さすがに、まだ見ぬ御住まひなれば、たどたどしけれど、人しげうなどしあらねば、寝殿の南面にぞ灯ほの暗う見えて、そよそよとする音する。参りて、「まだ人は起きてはべるべし。ただこれよりおはしまさむ」としるべして、入れたてまつる。(源氏物語（6)「浮舟」巻、p.119)

と、いずれも衣擦れの音などにより人の気配を描写するのに用いられている。物語における男女が闇の中で聴覚的にとらえた情感の連鎖によって場面が展開していくのであり、そこに心理状態との厳密な相乗効果を認めることができる。さらに嗅覚の刺激も加わると、目に見えない相手の立体感と存在感が増すのである。

臺灣大學學術期刊資料庫

四、衣服に染みた「人香(ひとが)」、「移り香(うつりが)」の嗅覚的意味

『古今和歌集』夏歌に、次ぎの「読人しらず」の名歌がある。

五月まつ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする[13]

このような衣装に染みた「人の袖の香」の例としては、『源氏物語』「空蟬」巻にある「かの薄衣は、小袿のいとなつかしき人香に染めるを、身近く馴らして見ゐたまへり」(源氏物語(1)「空蟬」巻、p.130)という着物の「人香」に連想させられ、同じく嗅覚の記憶を通して衣装を擬人化して官能の喜びを楽しむ描写が挙げられる。

平安時代、汗の臭いや体臭を消すためには、香は欠かせなかったろう。当時の香は、「練香」といって、二種類以上の香を合わせて薫いたものである。このため、多様な香の調合法が考案されて、調合の優劣を競うようになった。香のことをこの時代では、「薫物」と呼んでおり、「薫物合わせ」などという遊びも行われた。また、室内にも部屋の主の個性を表現する香を薫いておき、訪問してきた嗜みのある貴人を、どこからともなく匂ってくる良い香りでもてなす「空薫物」も行われた。

着物に染み込ませる香りである「薫物」の表現の集大成は『源氏物語』「梅枝」巻における、光源氏の異母弟である蛍兵部卿宮が薫物に合わせて光源氏の妻たちの人柄を判断する次の一節である。

> さらにいづれともなき中に、斎院の御黒方、さいへども、心にくく静やかなる匂ひことなり。侍従は、大臣の御は、すぐれてなまめかしうなつかしき香なりと定めたまふ。対の上の御は、三種ある中に、梅花はなやかにいまめかしう、すこしはやき心しらひを添へて、めづらしき薫り加はれり。「このごろの風にたぐへんには、さらにこれにまさる匂ひあらじ」とめでたまふ。夏の御方には、人々の香心々にいどみたまふなる中に、数々にも立ち出でずやと、煙をさへ思ひ消えたまへる御心にて、ただ

[13] 小沢正夫・松田成穂　校注／訳（新編　日本古典文学全集 11『古今和歌集』小学館、1994・11）巻第三、139 番歌　p.78
（五月を待っている橘が咲いて、その花の香りをかぐと、昔親しかったあの人の袖の香りが思い出され、とても懐かしい気分に誘われるよ。）

臺灣大學學術期刊資料庫

荷葉を一種合はせたまへり。さま変り、しめやかなる香して、あはれになつかし。冬の御方にも、時々によれる匂ひの定まれるに、消たれんもあいなしと思して、薫衣香の方のすぐれたるは、前の朱雀院のをうつさせたまひて、公忠朝臣の、ことに選び仕うまつれりし百歩の方など思ひえて、世に似ずなまめかしさをとり集めたる、心おきてすぐれたりと、いづれをも無徳ならず定めたまふを、「心ぎたなき判者なめり」と聞こえたまふ。（『源氏物語』(3)「梅枝」巻、p.409－410）

※黒方は冬（朝顔の姫君）、侍従は秋を感じさせる冬（光源氏）、梅花は春（紫の上）、荷葉は夏（花散里）の薫物である。薫衣香（明石御方）は特に季節を定めないようである。

練香による「薫物合わせ」は、単に楽しみのためにだけされているわけではなく、嗅覚を磨いて貴族たちの審美観、共感力を培う手段でもある。光源氏の妻たちを最高級の薫物で喩えるほか、その子孫の薫と匂宮に対しては、別次元の香りの美質を強調している点も考え合わせれば、そこに嗅覚的な審美感が強くはたらいていると言えよう。薫の体には生まれつき仏の身にあるといわれる芳香が備わっていた。匂宮は対抗心から衣服に薫物を薫き染めることに心を砕き、このため二人は世間から「匂ふ兵部卿、薫る中将」と呼ばれる。

また、「移り香」については『古今和歌集』雑歌上に紀友則の次のような和歌がある。

蝉の羽の夜の衣はうすけれど移り香濃くも匂ひぬるかな[14]

「香がみごとにたきしめてありましたので、今では私の下着にそれが濃く移って、いい香りを放っています」と、現代語に翻訳されたのは、やや嗅覚感がするが、まさに「移り香」によって、相手の姿を眼前に髣髴とさせるのである。

[14] 小沢正夫・松田成穂　校注／訳（新編　日本古典文学全集 11『古今和歌集』小学館、1994・11）巻第十七、876 番歌　p.333
（拝借した夜の着物は蝉の羽のように薄いものですが、香がみごとにたきしめてありましたので、今では私の下着にそれが濃く移って、いい香りを放っています。）

臺灣大學學術期刊資料庫

試みに『源氏物語』の「移り香」を検索してみると、全 16 例[15]のうち、宇治十帖は 11 例を占めている。『源氏物語』における嗅覚的な審美感は物語の後半に行くほどますます濃厚になり、薫と匂宮との二人の主人公をめぐる体臭香と人工香とが男女関係を身体(衣装)の匂いによって展開させ、嗅覚の感性を極めようとする。その中で「宿木」巻に、次のような薫の「移り香」が 2 例窺われる。

> さて、またの日の夕つ方ぞ渡りたまへる。人知れず思ふ心しそひたれば、あいなく心づかひいたくせられて、なよよかなる御衣どもも、いとど匂はしそへたまへるは、あまりおどろおどろしきまであるに、丁子染の扇のもてならしたまへる移り香などさへたとへん方なくめでたし。(『源氏物語』(5)「宿木」巻、p.423)

と、薫は「御衣」に入念に薫香を薫き染めて、丁子染の扇の「移り香」に加えて中の君を訪ね、懇ろに語り慰める。中の宮はいつも薫に対して他人行儀な扱いをするのも気の毒に思い、「今日は、御簾の内に入れたてまつりたまひて、母屋の簾に几帳そへて、我はすこしひき入りて」(「宿木」巻、p.424) 薫と対面する。しかし、二人が懇談しているうち、

> 声の、いみじくらうたげなるかなと、常よりも昔思ひ出でらるるに、えつつみあへで、寄りゐたまへる柱のもとの簾の下より、やをらおよびて御袖をとらへつ。女、さりや、あな心憂と思ふに、何ごとかは言はれん。ものも言はで、いとど引き入りたまへば、それにつきていと馴れ顔に、半らは内に入りて添ひ臥したまへり。(『源氏物語』(5)「宿木」巻、p.427)

と、薫は、物音などから簾中の中の君の挙動を想像しながら、中の君の声がなんと愛らしいことかと、亡き大君のことも思い出さずにはいられず、簾の下から押し入り中の君の袖をとらえて添い寝をしてしまう。薫の「移り香」があまりにも特殊なので、それは夫の匂宮に猜疑心を惹き起こさせる。

---

[15] 夕顔(1 例)若紫(1 例)薄雲(1 例)真木柱(1 例)紅梅(1 例)橘姫(1 例)椎本(1 例)総角(3 例)宿木(4 例)東屋(2 例)

臺灣大學學術期刊資料庫

かの人（薫）の御移り香のいと深くしみたまへるが、世の常の香の香に入れたきしめたるにも似ずしるき匂ひなるを、その道の人（匂宮）にしおはすれば、あやしと咎め出でたまひていかなりしことぞと気色とりたまふに、事の外にもて離れぬことにしあれば、言はん方なくわりなくていと苦しと思したるを、さればよ、かならずさることはありなん、よもただには思はじと思ひわたることぞかし、と御心騒ぎけり。さるは、単衣の御衣なども脱ぎかへたまひてけれど、あやしく心より外にぞ身にしみにける。（『源氏物語』（5）「宿木」巻、p.434～435）

と、中の君に深く染み込んだ薫の「移り香」で中の君は匂宮に咎められ、二人の仲を疑われたのである。

「人香」や「移り香」は愛好する香を薫き染めた衣裳の香と体臭とが自然に調和し、個人特有の香りとなったものである。衣装や身体に染み込んだ香りを嗅ぎ分ける力は視覚、聴覚よりも高い穿通力を発揮し、貴族たちの感性、判断力と恋の共感をより容易にさせる手段であった。

五、おわりに

以上、主に『源氏物語』における衣装の視・聴・嗅覚的審美観について各々述べてきたことをまとめて言えば、平安時代の衣装は、化粧文化の一環としての「薫物」の技術の進歩に伴って、現代ファッションのような衣装の色彩、文様と衣擦れの音との相乗効果によって繊細な感性世界を創り上げた。つまり、顔面に使う化粧品や瞬時的な「かいま見」などの視覚的効果は物語展開上の大きな役割を果たしているが、広く響き渡る音楽の音色のような聴覚的作用に較べると限界があると言わざるを得ない。同じ音声効果を発揮する衣擦れの音は、平安時代の貴族社会の衣装ファッションにおいて独特な文化史的地位を占めるだけではなく、物語における男女関係の展開にも微妙ながら印象深い役割を果たしている。しかし、空間的に隔てられ、見えなくなり、音声も聞こえなくなる場合、平安貴族た

臺灣大學學術期刊資料庫

ちはその隔たりを超えて拡がる「薫物」による嗅覚を磨くほかない。無形無音の香りや匂いは、最適な媒介物である衣装に染み込ませることで具象化する。また練香による「薫物」、「空薫物」や人が介在する「人香」や「移り香」などを通じて日常の嗜みとして嗅覚の美を演出し、物語における男女相互のコミュニケーションを図っていくほか、物語のプロットを展開させる創作手法としても有効である。

前述の「帚木」巻から「夕顔」巻まで続く空蟬物語を読めば、「かいま見」る場面において衣装は視覚、聴覚、嗅覚が綯い交ぜになるシーンとして描き出されている。特に「空蟬」巻の空蟬が光源氏から逃げる場面においては、

> かかるけはひのいとかうばしくうち匂ふに、顔をもたげたるに、ひとへうちかけたる几帳の隙間に、暗けれど、うちみじろき寄るけはひいとしるし。（源氏物語（1）「空蟬」巻、p.124）

と、視覚、聴覚、嗅覚が同時に触発されているのが明らかである。

また、前掲の「若菜上」巻の蹴鞠で柏木は女三宮を「かいま見」た場面において、「そよそよと身じろきさまよふけはひ」、「衣の音なひ」の聴覚的効果と御簾越しの女三宮の「裾姿」の色と模様の視覚的刺激も加味され、女三宮への恋慕の情熱が燃え上がる。結果としては周知のとおり二人は密通して悲劇を惹き起こしてしまうが、女三宮を「かいま見」た直後の次の一節は特に注目される。

> わりなき心地の慰めに、猫を招き寄せて抱きたれば、いとかうばしくてらうたげにうちなくもなつかしく思ひよそへらるるぞ、すきずきしきや。（源氏物語（4）「若菜　下」巻、p.142）

柏木はやるせない心の慰めに、猫を招き寄せて抱きしめるが、移り香もまことに芳ばしく、唐猫を女三宮その人に擬えずにはいられなくなる。その後、柏木は女三宮への一途に募る恋心を慰めるため、東宮を促して、「かいま見」の好機を作ってくれたあの女三宮の唐猫を預かることにした。その唐猫を女三宮の形代として愛撫する柏木の思いは、次のように異様に情熱的である。

> つひにこれを尋ねとりて、夜もあたり近く臥せたまふ。明けた

臺灣大學學術期刊資料庫

てば、猫のかしづきをして、撫で養ひたまふ。人げ遠かりし心もいとよく馴れて、ともすれば衣の裾にまつはれ、寄り臥し、睦るるを、まめやかにうつくしと思ふ。いといたくながめて、端近く寄り臥したまへるに、来てねうねうといとらうたげになけば、かき撫でて、うたてもすすむかな、とほほ笑まる。

「恋ひわぶる人のかたみと手ならせばなれよ何とてなく音なるなん

これも昔の契りにや」と、顔を見つつのたまへば、いよいよらうたげになくを、懐に入れてながめゐたまへり。(源氏物語(4)「若菜　下」巻、p.158)

猫を女三宮に見立てるのは柏木の狂おしい恋に堪えかねての挙動であり、柏木は女三宮の移り香の染み込んだ唐猫を肌身離さず抱きいれる。柏木は聴覚、視覚の刺激を受けただけではなく、唐猫の香りを通して嗅覚的に女三宮に繋がることで、より強く相手を求めているのである。

「花宴」巻末の光源氏が右大臣の藤の宴で、朧月夜の君を探す次の場面も、

寝殿に女一の宮､女三の宮のおはします｡東の戸口におはして、寄りゐたまへり。藤はこなたのつまにあたりてあれば、御格子ども上げわたして、人々出でゐたり。袖口など、踏歌のをりおぼえて、ことさらめきもて出でたるを、ふさはしからずと、まづ藤壺わたり思し出でらる。(中略)重々しうはあらねど、おしなべての若人どもにはあらず、あてにをかしきけはひしるし。そらだきものいとけぶたうくゆりて、衣の音なひいとはなやかにふるまひなして、心にくく奥まりたるけはひは立ちおくれ、いまめかしきことを好みたるわたりにて、やむごとなき御方々物見たまふとて、この戸口は占めたまへるなるべし。(源氏物語(1)「花宴」巻、p.364～365)

と、春の朧月夜に微醺を帯びた中で藤の花、袖口、藤壺の面影、空薫物、「衣の音なひ」などが視覚、聴覚、嗅覚が綯い交ぜとなり夢幻

臺灣大學學術期刊資料庫

的な場面を演出したと考えられる。

日本平安朝の貴族たちの感性は視覚的審美観から聴覚的、嗅覚的審美観へと発達してきた。男女がお互いに全身で表現できる衣装は、色彩、自然と共鳴しあう襲や文様、衣装に染み込んだ「人香」、「移り香」などを通して各々視覚、聴覚、嗅覚の美を表現しうるだけではなく、視・聴・嗅覚的審美観を一体化し効果を上げることも可能だったのである。

【付記】中華民国科技部の専題研究計画「日本平安朝物語文學中的化妝文化與美學意識（日本平安朝物語文学における化粧文化と美意識）(II-II)」（MOST 105-2410-H-030-027-）補助金を受け、書き下ろしたものである。

【テキスト】（出版年代順）

野口元大校注(1979) 新潮日本古典集成『竹取物語』新潮社

片桐洋一　福井貞助　高橋正治　清水好子　校注／訳（1994)『竹取物語　伊勢物語　大和物語　平中物語』新編日本古典文学全集　小学館

小沢正夫・松田成穂　校注／訳（1994)『古今和歌集』新編日本古典文学全集　小学館

阿部秋生　秋山 虔　今井源衛　鈴木日出男　校注／訳(1994～1998）新編日本古典文学全集『源氏物語（全 6 巻)』小学館

中野幸一 校注・訳(1999～2002）新編日本古典文学全集『うつほ物語（全 3 巻)』小学館

三谷栄一 三谷邦明 稲賀敬二 校注・訳(2000) 新編日本古典文学全集『落窪物語／堤中納言物語』小学館

臺灣大學學術期刊資料庫

【参考文献】

データベース

「新編 日本古典文学全集」
（知識探索サイト　ジャパンナレッジ　プラス　JapanKnowledge+）
http://www.jkn21.com/koten/displaymain

専門書籍と機関誌論文（出版年代順）

今井源衛(1948)「古代小説創作上の一手法ー垣間見についてー」『国語と国文学』第 25 巻 3 号

今井源衛(1970)「物語構成上の一手法——かいま見について——」『王朝文学の研究』角川書店

高橋雅夫（1997)『化粧ものがたり—赤・白・黒の世界』雄山閣

藤原克己、三田村雅子、日向一雅　著『源氏物語—におう、よそおう、いのる』ウェッジ

安原盛彦(2013)『源氏物語　男君と女君の接近—寝殿造の光と闇－』河北新報社

頼振南（2016)「視覚的審美観から聴覚的、嗅覚的審美観への発達—平安朝初・中期の作り物語を中心に—」『台大日本語文研究』32 期

臺灣大學學術期刊資料庫